

莎草科植物雜記 (II)

大井次三郎

8) ミヤマイヌノハナヒゲとヤチスゲ。

但馬國の氷ノ山は高さ 1510 m. あり中國山脈では大山に次ぐ高峰であるが、同山頂に程近い濕地にはミヤマイヌノハナヒゲ (*Rynchospora Yasudana* MAKINO) 及びヤチスゲ (*Carex limosa* LINN.) 等、高山濕原に生ずる莎草科植物があるのは注目に値する。京都府福知山小學校に在職された荒木英一氏が發見、採集して持參されたもので兩者共、その分布上本州での西限をなすものと思はれる。

9) *Carex platyrhyncha* FRANCH. et SAVAT. とは何か。

Carex platyrhyncha FR. et SAV. は SAVATIER 氏が横須賀附近で採集した標本によつて FRANCHET et SAVATIER 兩氏が記載した種で吾人には久しく疑問とされて來たものである。

更に FRANCHET 氏に従へば *Carex nutans* var. *japonica* FR. et SAV. は此の種と同じものである由であり、又 KÜKENTHAL 氏は兩者共 *Carex nutans* var. *platyrhyncha* となるべきものと考へて居る。

幸ひ當教室には此れ等の學者の檢定した U. FAURIE 氏採集標品の大部が保存してあるので見た所がピロードスゲ、カウボウシバ及びオニナルコスゲ類似の一品の三色が引用され居るのが判つた。

原産地と記載から考へて見て此れ等三種の内ではカウボウシバが最も可能性がある様に思つては居たが尙決定が出来ず、そのまゝにして居つた。

頃日巴里博物館の H. HUMBERT 教授の厚意で原標本 (SAVATIER n. 2050) を見る事が出来たがやはり私の想像通りカウボウシバであつて、それが未熟であつたのと海岸から離れた所に生ずる丈の高い伸び加減のものであつた爲めに FRANCHET, KÜKENTHAL 兩氏をまどはしたのである。

10) ヌイオスゲ *Carex amblyolepis* TRAUTV. et MEY. の産地。

ヌイオスゲは從來本邦では樺太と北千島とだけに知られたヒメスゲ類似の一品であるがヒメスゲよりも果囊の巾が廣くて球形に近く、その毛が稍少く、雄花鱗片の縁邊がヒメスゲよりも薄くて破れ易いので區別が出来る、樺太の標本は雄花穂が長く著しいが、南千島のものは長いのも短いのもあつて此の點は餘り明瞭な區別點には成らぬ。

北海道本道ではまだ記録がなく又標本も見ないが何れ何處かで発見される機会があらう。本州でも従来未知のものであつたが高山帯に比較的稀れに産し、信州の八ヶ岳で高橋幹夫氏が採集し、羽後の月山では私が採集した。

ちなみに KÜKENTHAL 氏が *Carex gifuensis* として発表した樺太産の標本は實はクロヒナスゲではなく此のヌイオスゲである。又同氏は *Carex Vanheurckii* MUELL. ARG. をヒメスゲに似たものとして居るが私は此の *C. amblyolepis* TRAUTV. et MEY. と考へる。

11) ヌマアゼスゲ (*Carex cinerascens* KÜKENTH.)

Carex cinerascens KÜKENTH. は故 U. FAURIE 氏が西暦1897に仙臺市、鹿島臺で採集して以來、誰れも之れを採集した人がなかつたが、昨年五月に下野國、下都賀郡、赤麻沼で關本平八、伏木兩氏が採集したので同地にも産する事が明かに成つた。従来和名が付けてなかつたのでヌマアゼスゲと新稱する。

C. P. Thunberg 氏の日本植物採集

北 村 四 郎

安永五年(1775)八月十五日、日本植物研究の志をいだき和蘭醫官として海路はるばる長崎に到着せる植物分類學者チュンベリーは歳三十三であつた。

當時鎖國政策を行へる我が國にて材料の蒐集を必要としたチュンベリーは非常の苦心を盡した。この材料こそ我が國最初の植物誌を生み日本植物分類學の基石となつてゐる。

異國人に對し頗る警戒せる當局者は一般に和蘭人が其の居留地なる出島より自由に外出するのを固く禁じてゐたのでチュンベリーは長崎附近の地に植



チュンベリー氏

THUNBERG 氏は Sweden, Götland, Jönköping にて1743年11月11日に生る。Upsala に近き Tunaberg にて1822年8月8日に死す。LINNEAUS に Upsala 大學で教はりこゝを卒業す。